短編　　5

story by aono

photo by hiros

十月十二日地方版朝刊より抜粋

『女子生徒が転落死』

　十一日午後五時頃、Ｆ市立原山中学校で生徒が転落する事故が起きた。事件当時、体育館で部活動をしていた生徒の話では、突然「ドスン」と大きな音がしたので外へ出てみると女子生徒がうつ伏せで倒れていたという。
　すぐに救急車で病院へ搬送されたが、まもなく死亡が確認された。
　生徒は同校二年の如月恵さん（十四）で、屋上から転落したとみられている。警察は事故と自殺の両面から調べをすすめている。

如月啓子の独白

　恵が死んで、もうひと月が経った。気付かないうちに、銀杏の葉も黄色になっている。こうして季節は巡るのね。
　私はまだ生きている。
　どうして息ができるのだろう。どうして食べることができるのだろう、恵がいないのに。
　屋上からの転落死だと警察は言う。自殺の心当たりはないかと聞くなんて、警察もどうかしているわ。まさかあの子が自殺なんてするはずない。そう、遺書だってないのよ。自殺のはずないじゃない。
　屋上には椅子が残されていて、その上に乗って金網を越えたらしいと聞いたけど、それってどういうことなんだろう。
　あんなに活発でよい子なんてめったにいない。中学での成績だってクラスでトップ。ご近所の評判だって良いのよ。決して親の欲目じゃないわ。
　生まれた時はそれはそれは可愛かった。珍しいほど整った顔の赤ちゃんですねって、看護婦さんにも言われたくらい。
　あなたは私たちの宝物だった。
　幼稚園の頃から、先生に褒められることはあっても叱られるようなことはなかった。かわいいわね、賢いわね、と言われどおし。それに値する子供だった。
　四月生まれということもあったかもしれないけど、他の子より何でも早くできたわ。字を読むのも、数えることも、ピアノも。
　運動神経だってよかった。かけっこはいつも一番。ああ、恵。もう一度走る姿が見たい。
　小学校でも中学校でも、友達が多くいたし、皆に慕われて、頼られて、出来すぎた子だったから神様が連れて行ってしまったのかしら。恵と仲のよかった子に警察も聞いてみれば、どんなに素晴らしい子だったかわかるはずよ。自殺する理由なんてないってことも。
　返して、私の恵を返して。神様、どうか私の願いを聞いてください。
　たった十四歳なのに。なぜ死ななきゃならないの。あの子のいない生活なんて考えられない。
　事故ということも考えられるけど。
　屋上に椅子があったって警察が言ってた。
　椅子の上に乗って金網を越えたですって？
　まさか恵はそんなことしない。する筈がない。警察は何をばかなことを考えているのかしら。—もしかして……　突き落とされた？　恵を妬む誰かに。
　そうよ、そうに違いない。絶対そうだわ。
　いったい誰が？　そいつを見つけ出して殺してやる。恵と同じように屋上から落としてやる。
　お母さんが仇をとってあげるからね。こうしてはいられないわ、犯人を探さないと。警察なんて頼りにならない。
　恵、お母さんに力を貸して。

佐伯洋介の独白

　僕が担任をしているクラスの生徒が死んだ。
　如月恵。
　教師歴がまだ三年の僕にはきつい話だ。責任を問われることはあるのだろうか。それが一番心配だ。
　如月は屋上から転落したらしい。何故、屋上にいたんだろう。椅子が残されていたようだが、自分で持ち込んだということか？
　僕にはわからない。
　金網を乗り越えるだなんて、およそ如月らしくない行動だ。
　誤って転落？　そんな不注意な子ではないと思う。
　警察は自殺の線も考えているようだが、それこそ天地が逆になっても如月が自殺することはないだろう。そういう子だ。警察にもそう説明したんだが、わかってくれたとは思えない。
　自殺となると、やっぱり僕にも責任があるといわれるのだろうか。
　よしてくれ、僕には何の関係もない。迷惑な話だ。
　彼女は成績も優秀。近頃では珍しく、家庭でのしつけもちゃんとして、挨拶もしっかりしていた。こんな子もいるんだって僕は感心し、嬉しく思った。それに何より、クラスを引っ張って行く力があった。
　僕が彼女をひいきしていると思っている生徒もいたようだが、実力のある子に目をかけるのは当然のことだ。まあ、大きな声では言えないが、顔も可愛かったし。ブスより美人の方がいいに決まってる。
　あれからクラスの雰囲気が変だ。授業中も休み時間もやけに静かだ。
　静かすぎる。
　黒い雲が覆いかぶさっているような、誰もが息を殺しているような、そんな感じがする。如月の存在が大きかったせいだろうか。それとも自殺か事故かはっきりしないからか。
　警察は一体何をしているんだ。
　ともかく、早く平常に戻りたいものだ。ひと月も経つのにいつまでもこんな雰囲気だと、校長から注意されるかもしれない。査定に響く。
　よりによって僕の担任の子が死ぬなんて。本当に僕は運が悪い。自殺じゃないことを祈るだけだ。まだ事故の方がましだ。
　早く忘れたい。

江原信二の独白

　恵は小学校から性格が悪かったね。顔はちょっと可愛かったけどさ。
　あいつを好きになるやつの気がしれない。何人もとりまきを作って、いつもつるんでいて。
　まあ、勉強ができたのは認める。大人の受けも良かったなぁ。センコウが人を見る目がないのは当たり前だけどね。オレのおふくろも騙されてた口だ。大人はああいうタイプに弱いね。顔と成績が良いだけで信じちまう。笑えるよ。
　小学校六年の時、オレの忘れものを届けにあいつがうちに来たことがあった。オレは学校の机の中にわざと忘れてきたんだよ、おふくろに見られたくないから。あいつはオレが叱られるのを見たくて届けたんだ。あのテスト、何点だったっけ。思い出したくもない。
「今日、机の中の点検日だったんです。江原君が忘れていったようなので届けに来ました」底意地悪いやつ。
　オレたちの小学校では机の中を空にして帰らなきゃいけなかったことは確かだけど、学級委員だからって、余計な世話ってもんだ。テストを見たおふくろは怖い顔をしてオレをにらんだ。
「こんな点数を優等生の如月さんに見られて、お前は恥ずかしくないの」だってさ。
　そればかりじゃない。あいつ、男に見せる顔と女に見せる顔、違うんだぜ。
　オレはずっと恵と同じクラスだったからよく知ってるんだ。オレは男でも嫌われてたなぁ。
　琴美は気の毒だったね、恵から目の敵にされて。でもオレが庇ってやる義理もない。知らん顔するのは当然。
　転落死したって聞いて「あいつ、結構嫌われてたからな」って呟いたら、死んだ人を悪く言ってはいけないって注意された。
　けど、死んだからって良い人になるわけないじゃん。
　葬式の時、生徒会長の岡部がべた褒めの弔辞を読んでたけど、ほんとにそう思ってるんだったらまったく大間抜けだ。
　オレはあいつが大嫌い。葬式でも悲しくなかったもん。涙なんて出ないさ。いなくなって嬉しいよ。
　あいつが死んで、世の中が少し明るくなるんじゃねぇかな。少なくても、オレにとってはラッキーだった。琴美にとってもそうだったんじゃねえの？

河西未央の独白

　あたし、あの時屋上にいたのに何にも気付かなかった。叫び声で振り向いたら、恵の体が金網を越えて落ちていくところだった。
　今でもその時の光景が頭から離れない。目をつぶっても、首を振って追い払おうとしても恵の姿が目の前に浮かぶ。
　耳には叫び声が残ってるし、頭の中でいつでも響いている。
「キャーッ」っていう声。忘れられないよ。
　金網に駆け寄って、下を見たら恵がうつ伏せに倒れていた。
「まさか死んでないよね」って皆で言いながら、慌てて階段を駆け降りた。校庭に出る前に、人がたくさん集まってきたから、急いで学校から飛び出したんだけど。
　理由？　自分でもわからない。パニックになってたんだ。優も絵美もあたしも、そしてきっと琴美も。
　中学一年で恵と一緒のクラスになった時は、とてもうれしかった。
　可愛いし、頭もいいし、あたしは恵に憧れた。
　あんな風になりたいといつだって思ってたんだ。恵があたしに声をかけてくれたときは舞い上がっちゃったよ。それにちょっと得意だった。クラスの人気者だったからね、男子にも女子にも。その時は恵があんな性格をしてただなんて、思いもしなかった。
　宿題は教えてくれるし、かっこいい男の子にも紹介してくれるし、夢のようだった。でも何故だかわからないけど琴美を嫌っていた。あたしたちにも琴美と話してはダメって命令した。無視しろって。
　だから琴美はクラスでは孤独だったんじゃないかな。あたしたち、ネットでも琴美の悪い噂を流して喜んでた。あれは面白かった。
　恵がいなくなって、少しほっとしている。自分が琴美みたいな目にあったら嫌だもん。死にたくなるもん。
　屋上であったこと、琴美が警察に話したらどうしよう。
　あれからあたしたちの関係は逆転して、今は優もあたしもびくびくして、琴美の顔色を窺ってる。
　時々私たちの顔を見てあざ笑うような気がするよ。なんだか不気味。気にしすぎだって絵美は言うけど。

河西文子の独白

　優等生の恵ちゃんが亡くなるなんて、世の中は理不尽だわ。お気の毒に。
　惜しまれる人ほど早く死ぬってほんとなのね。可愛くて頭がよくてお行儀も良くて、欠点のない子だったわ。どういう訳かうちの未央と仲良くしてくれて、ありがたいことだった。
　うちの子のどこが気に入ったのか不思議だったけど、きっと気が合ったんでしょうね。
　未央もとてもショックを受けたらしくて、あれから精神状態が不安定で心配だわ。こんな状況が続くようなら病院へ連れて行こうかしら。それともカウンセリングを受けさせるべきか、考えどころ。
　ともかく、そろそろ立ち直ってほしいわ。
　来年は三年生になるのだから受験もあるし、二年の成績も大事なのよ。未央は分かっているんでしょうね。
　もうあれからひと月にもなるのだから、学校も何かしら対策をたてても悪くはないと思う。恵ちゃんは可哀そうだったけど、生きている者には将来があるのだから、そこのところを考えてくれないと。
　クラスの中も重苦しい雰囲気らしいし、そんなこんなで勉強がかなり遅れているって噂。困ったことね。
　担任は若くて頼りにならないから、教育委員会か校長にでも談判した方がいいかしら。明日にでも他のお母さんたちとも相談してみよう。
　いくら優等生でも死んでしまってはどうにもならないわ。未央は頭もたいして良くないし、贔屓目に見ても可愛いとは言えないけど、生きていてくれるだけ良かった。
　自殺って噂もあるけどほんとかしら。恵ちゃんには悩みなんてなさそうだけど、他人だから言えることかもしれない。
　事故とも考えにくいし。
　あの日、屋上にひとりでいたらしいから、やっぱり自殺でしょう。思春期の女の子の気持ちはわからないわね。未央は楽天的な性格だから、安心できるわ。自殺なんて考えもしないでしょうよ。

日比野優の独白

　あたしはあれから怖くて仕方ない。琴美は絶対仕返しをしてくる。恵が死んだら、琴美に怖いものはないもの。
　悪かったと今は思ってるけど、あの時は仕方なかったんだ。恵の言う通りにしないと何をされるかわからないから。琴美だってそれはわかってるでしょ。だから、もうあたしたちを許して。お願い。
　毎日学校へ行くのがつらくてしょうがない。行きたくない。登校拒否になりそう。
　琴美はあれだけ苛められても学校を休まなかった。何故だろう。
　毎晩、あたしはあの時のことを夢に見る。
　恵が落ちていく。
　あたしたちはその直前の状況は見ていない。だって恵には背中を向けていたんだもの。未央と絵美とあたしの三人で屋上に呼び出した琴美を脅していた。
　あたしたちは金がほしかった。親からの小遣いじゃ足りないし、琴美から金を巻き上げようってことになった。持ってこなかったら、首吊りの真似事でもさせようって恵が言い出した。
「少し脅してやろう」
　教師にいいつけられても平気だ。恵は信用があるから。琴美が嘘の告げ口をしていると思われるだけ。
「金をもってきてないなら、ここに琴美を立たせなよ」と恵が言って、教室から持ち出した椅子を屋上の金網のそばに置いた。たしかロープもそばにあった。
　あのロープはどうなったんだろう。
「ほら、こうやって立たせれば……」っていう恵の声は聞いたけど、その後、悲鳴が聞こえてあたしたちは振り返った。
　その時はすでに恵の体は金網の外だった。あたしたちは急いで階段を降りた。
　琴美はどうしたんだったかな。
　校庭へ行こうと思ったけど、人がいっぱいいて、あたしたちは怖くなった。何か聞かれるのはいやだ。なんて言っていいかわからないし。
　あのとき琴美はどこにいたんだっけ。

岡部雄太の独白

　如月恵さんが屋上から落ちた時、ボクは体育館でバスケットの練習をしていた。
　八月いっぱいで三年生が引退して、ボクは生徒会長になり、バスケットのキャプテンもしていた。
「ドスン」と大きな音がしたので体育館から出てみると、女生徒がうつ伏せに倒れていた。どうしたのかとそばへ寄ってみたら、血が流れていて、体も変な具合に折れ曲がっていて、今思い出しても気分が悪くなる。
　それがあの如月さんだと知ったとき、ボクは衝撃を受けた。
　好きだったんだ。
　同じクラスになったことはないし、あまり話したことはないけど、彼女は学校では有名人だったから気になってた。可愛いし、頭もいいし。清楚な感じもするし、茶髪じゃないし。ボクの好みだった。
　生徒を代表して彼女のお葬式で弔辞を読んだ時は、泣けそうだった。あんな素敵な人が死ぬなんて。ボクの心からの弔辞を彼女は聞いてくれたかな。
　あとから悪い噂も聞こえてきたけど、ボクは信じない。やっかみからくる噂だ。彼女がかわいそうだ。死んでしまっては言い返すこともできない。それなのに悪口をいうのはフェアじゃないと思う。
　もう、あれからひと月経つ。皆が如月さんのことを忘れてしまうようで悲しい。せめてボクだけはずっと覚えていよう。
　事故だか自殺だかはっきりしていないようだけど、ボクは不幸な事故だったと思う。如月さんが自分で命を絶つはずはないじゃないか。そんな簡単なことが、警察にどうしてわからないんだろう。
　クリスマスにボクの気持ちを伝えようと思っていたのに、できなくなってしまった。
　如月さん、安らかに眠ってください。ボクはこれからもずっとあなたのことが好きです。

進藤絵美の独白

　みんなは恵のことを誤解してる、てか、分かってない。恵は優等生だって？　ふざけんじゃねえ。あいつは悪魔。天使の顔をした悪魔って言葉があるじゃん。それがぴったりだ。
　アタシがどんだけひどい目に会ったか、わかんねぇだろう。
「ねえ、絵美ちゃん」あいつは猫なで声で話しかけてくる。
「もし、私が進藤絵美はカンニングをしてますって先生に言いつけたらどうなると思う？」
「カンニング？　してないぞ」
「先生はどっちを信じると思う？」
「オイ、どういうつもりだ」アタシは頭にきた。
「絵美ちゃんの両親にも言いつけようかな」
「オイ」
「本当のことなんてどうでもいいの」といって意地悪く笑う。そうやってあいつはアタシを苛める。
　ぶん殴ってやりたいと思った。でも殴れなかった。あいつに怪我でもさせたら、アタシは少年院にでも送られかねないね。
　あいつは何を言うかわからない。嘘を百もならべるだろうよ。でも、大人はあいつを信じる。
　あいつがアタシを苛めるようになったのはアニキのせいだ。電車の中でアニキに恥をかかされたと言いやがった。シルバーシートでメールを打っていたのを注意しただけだとアニキは呆れてた。
　なんでそれでアタシが苛められなきゃいけないんだ？
　学校の中ではあいつには勝てない。センコウに絶大な信用があるからな。それでアタシはあいつの取り巻きのひとりになった。いつか仕返しをしてやろうと決めて。
　あの日チャンスがやってきた。
　仕返しはうまくいった。
　うまくいきすぎたというか、あそこまでは望んでいなかった。
　そして、別の脅迫者ができちまったよ。
　つくづくアタシはついてない。

小林琴美の独白

　私は如月恵に嫌われていた。ただ気に食わないだけかもしれない。いじめのターゲットにされていたことは確かだ。理由は知らない。恵が死んでしまった今では、どうでもよいことだ。

　あの日の放課後に、私は恵の取り巻き連中に屋上へ呼び出された。私からお金をむしり取ろうという魂胆だ。それはわかっていたが私はお金を用意しなかった。一度渡せばきりがないと知っていたから。
　嫌がらせはされても暴力までは振るわないだろうという私の考えは甘かった。
　屋上で私を待ち受けていた恵は、椅子を屋上の転落防止用の金網の側へ置いて言った。ご丁寧にロープまで持っている。
「金を持ってこなければ、ここに立ってもらうから。ここで首をつるのもおもしろいかもね」
　椅子の上に乗ると、金網の高さは膝あたりまでしかない。押されれば屋上から転落する。
　取り巻きの三人は私の腕を掴んだ。腕づくで私を椅子の上に乗せるつもりだ。恵はそのすぐ後ろにいた。そして見本を見せるつもりだったのか、自分が椅子の上に立った。
「こうやって立たせれば……」
　だが、その声は悲鳴に変わり、バランスを失って屋上から校庭へ転落していった。取り巻きの三人は恵に背中を向けていたが、私は恵と対面していた。だから一部始終を見ていた。
　進藤絵美が後ろ足を椅子の脚にひっかけたのを。
　そのために椅子が揺れて恵がバランスを失ったのを。
　どうして絵美がそんな事をしたのか、私には興味はない。
　恵に運があれば、金網のこちら側に倒れて怪我だけですんだだろう。しかし恵は金網を飛び越して落ちて行った。私は絵美に向って、にやっと笑い、ロープを拾った。
　もう、ここにいる必要はない。ロープを持って私は学校を出た。
　思いがけず、三人の首根っこを捕まえた。この切り札をどうやって使うか、今思案中。
　未央や優のおどおどした態度が愉快だ。せいぜい怯えていなさい。
　絵美は開き直っている。私を共犯とでも思っているのか。
　ロープは家で処分した。持って帰った理由はとくにない。屋上に余計なものを残しておきたくなかっただけ。

　私たちが屋上にいたことを誰も知らない。
　私たちが警察に話すわけもない。

十一月三十日、如月恵は誤って屋上から転落し死亡したとして、警察は捜査を打ち切った。

-fin-